

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02371

研究課題名(和文) 国際展は地域コミュニティ活性化に寄与するのか：定性的分析からのアプローチ

研究課題名(英文) Do Contemporary Arts Festivals Contribute to Vitalization of Local Communities?: Approach of Qualitative Analyses

研究代表者

吉田 隆之 (Yoshida, Takayuki)

大阪市立大学・大学院都市経営研究科・准教授

研究者番号：00771859

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：地域づくりにつながる戦略が見られる7つの芸術祭を研究対象として、地域づくりへの影響を分析・考察した。あいちトリエンナーレと大地の芸術祭の2事例で、個別の会場等に着目し、定性的分析により、地域づくりの中長期的効果とその具体的プロセスを明らかにした。ただ、地域づくりの効果が見られる他の5つの芸術祭については、短期的な一時的変化を捉えるにとどまった。とはいえ、これまでの現地調査・分析を踏まえ、芸術祭が地域づくりにつながる主な3条件が、1) 地域資源の活用、2) 地域コミュニティの主体性、3) 持続可能な戦略を持つことである、との仮説をたてた。当該仮説の検証が今後の研究課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

あいちトリエンナーレと大地の芸術祭の2事例で、個別の会場等に着目し、定性的分析により、地域づくりの中長期的効果とその具体的プロセスを明らかにした点に学術的意義がある。国際展をやりさえすれば地域活性化に資する風潮があるなか、現時点では、仮説にとどまっているものの、芸術祭が地域づくりにつながる条件を明らかにしたことで、国際展が地域づくりへの過大な期待を背負われている状況を改善していく道筋を示した点に、社会的意義が認められる。また、地域づくりの効果を明らかにしたことで、観光客増など芸術文化を短期的に地域活性化の手段とする傾向に歯止めをかけることができよう。

研究成果の概要(英文)：I targeted seven art festivals that utilize strategies that have led to regional development to analyze and consider their impacts on regional development. In the two cases of the Aichi Triennale and the Echigo-Tsumari Art Triennale, I focused on individual venues and clarified medium- to long-term effects and concrete processes on regional development through qualitative analysis. For the other five art festivals, only short-term changes were revealed. However, based on past field surveys and analysis, three main conditions of art festivals that lead to regional development are 1) utilization of local resources, 2) independence of local communities, and 3) a sustainable strategy. That is the hypothesis. Verification of this hypothesis is a future research theme.

研究分野：芸術政策

キーワード：芸術祭 地域づくり ソーシャルキャピタル アートプロジェクト 内発的発展論 文化政策

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2000 年以降国内で国際展が流行する。本研究で国際展とは) 数ヶ年の周期で開催され、) 現代美術を内容とする芸術祭をいう。研究開始の平成 28 年度 (2017 年度) 時点で、国内では、こうした国際展が、4 政令指定都市 (札幌市・新潟市・名古屋市・さいたま市) と、4 つの過疎地 (新潟県越後妻有、瀬戸内、千葉県市原市南部、茨城県県北) で開催されていた。日本の特徴として地域コミュニティや観客との関係を重視する傾向があることから、地域活性化への期待が社会的関心と呼ぶ。ところが、国際展による地域コミュニティの活性化は日本特有の、しかも最近の事象であり、それをテーマとする研究は国外に無く、国内でも端緒についたばかりである。報告書などで経済効果が測定されているが、それでは観光関連産業以外の地域課題解決につながるかが見えてこない。住民や地域の変化を捉える必要がある。

こうした視点に基づく研究は、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ (以下大地の芸術祭)」と、申請者によるあいちトリエンナーレの事例研究があるだけである。大地の芸術祭の研究に関して、ソーシャルキャピタルを用いた定量的研究 (参考文献 1) は、形成の有無を統計的分析により客観的に明らかにした点で優れているが、その具体的プロセスが明らかとなっていない。また、定性的研究 (参考文献 2、3) はインタビューの関係者数が少なく、しかも、ソーシャルキャピタル形成の母体となる個別の集落の状況を分析せずに、複数の集落や会場全体を集合的に捉えているなど、問題点を持つ。そうしたなか、申請者は、あいちトリエンナーレを事例に、既存の研究とは異なる視座で個別の会場に着目し、定性的分析により地域コミュニティ活性化に寄与する具体的プロセスを内外で初めて詳細に解明していた (参考文献 4)。

2. 研究の目的

本研究は、上記アプローチで幅広くあいちトリエンナーレ以外の他の国際展についても、現地調査を実施し、定性的分析を行う。これらの研究結果を総括的に分析し、国際展が地域コミュニティ形成に寄与するための一般的条件と効果を検証することを目的とする。

3. 研究の方法

1) 調査対象と方法

平成 29 年度 (2018 年度) から調査対象の国際展について、開催年を中心に、個別の会場ごとに現地調査を行った。多様な関係者にインタビューをし、継続的な変化のみならず、一時的な変化についても、それぞれ下表 1 の指標・基準で、地域コミュニティ活性化の具体的プロセス、条件・効果の定性的分析を行った。

表 1 評価指標と基準

	指標	基準	
継続的な変化	ソーシャルキャピタル	形成	信頼 規範 ネット ワーク 自発的な協力 地域全体への広がり 継続性
一時的な変化	提案力・行動力	向上	
	ネットワーク	広がり	

当初研究対象を、上記 8 つの国際展に焦点をあてていたが、中止される国際展や地域コミュニティ活性化・影響等が見出し難かったものもあった。一方で、2017 年から始まった奥能登国際芸術祭、リボンアート・フェスティバルでは、地域コミュニティ形成につながる戦略や萌芽がみられた。そこで、当初から研究対象としていた「あいちトリエンナーレ 長者町会場」、「大地の芸術祭 筋平集落」、「水と土の芸術祭 小須戸 ART プロジェクト」、「いちばらアート×ミックス 内田・月崎・養老溪谷」、「札幌国際芸術祭 札幌市資料館」に加え、「奥能登国際芸術祭 飯田・正院・若山」、「リボンアート・フェスティバル はまさいさい・石巻のキワマリ荘」を研究対象とすることとした。

2) 調査結果の総括的分析 調査結果を踏まえ、具体的プロセス、要因・効果を総括的に分析し、国際展が地域コミュニティの活性化に寄与するかについて、一般的・普遍的な条件と効果を検証した。

4. 研究成果

調査開始前に、「あいちトリエンナーレ 長者町会場」については、博士論文・単著 (参考文献 4) で、ソーシャルキャピタルがプロアクティブ化したとして、地域コミュニティ形成への中長期的効果を明らかにしていた。本研究により、「大地の芸術祭 筋平集落」についても、

国際展によってソーシャルキャピタルが形成され、地域コミュニティ形成への中長期的効果を明らかにした。いずれも開催から10年以上が経過している。

一方で、「水と土の芸術祭 小須戸 ART プロジェクト」、「いちほらアート×ミックス 内田・月崎・養老溪谷」、「札幌国際芸術祭 札幌市資料館」については、開催から約5~6年、「奥能登国際芸術祭 飯田・正院・若山」、「リボンアート・フェスティバル はまさいさい・石巻のキワマリ荘」は、開催から約2-3年にとどまる。そうしたこともあり、～ については、短期的な一時的な変化を捉えるにとどまった。

では、本研究で明らかとした～ の各国際展の個別会場の地域コミュニティ活性化への効果を、具体的プロセス等に注目しながら、紹介しよう。

「あいちトリエンナーレ長者町会場」の事例研究は、上記博士論文・単著があいちトリエンナーレ2010・2013を分析したのに対し、あいちトリエンナーレ2016を取り扱い、あいちトリエンナーレ2010・2013との比較を行った。これらの「あいちトリエンナーレ 長者町地区」に関わる事例研究、「大地の芸術祭 筋平集落」の事例研究では、参加協働型の作品で、かつ住民らの自発性に働きかけやコミットがみられたことで、中長期的効果としてそれぞれに自発的活動が継続され、ソーシャルキャピタル形成への寄与が分析された。なかでも、長者町地区では、地域コミュニティの主体性が特徴となっている。

それに対して、「水と土の芸術祭 小須戸 ART プロジェクト」の事例研究では、サイトスペシフィック型作品による地域資源の活用に住民の交流を組み合わせたことで、商店街への理解の広がり、町屋活用、誇りの回復につながろうとしている。

ここまでは、作品の性格やアーティストの側から見てきたが、「いちほらアート×ミックス 内田・月崎・養老溪谷」の事例研究では、視点を変え、地域の取り組みの側から芸術祭をきっかけにした地域づくりへの効果を掘り下げた。すなわち、効果をもたらした地域の受け入れ態勢として、1) 既存の拠点(地域づくり)連携・発展型、2) 作品展示継続型、3) 新たな拠点形成型の3パターンを示した。参加・協働型の作品やサイトスペシフィック型の作品に開幕前後のこうした地域側の持続可能な戦略が組み合わさることで、地域づくりへの影響が生じやすくなると考える。

一方で、上記でとりあげた地区等以外でも、今後地域づくりにつなげられるのだろうか。地域づくりにつなげられないとしたら、その要因は何なのかを、次のとおり考察した。

初回閉幕後の時点では地域づくりに大きな影響が見られなかった「奥能登国際芸術祭 飯田・正院・若山」の事例研究では、地域づくりにつながらない要因を考察した。その要因とは、1) サイトスペシフィック型の作品展開で地域住民との交流を図るなど地域資源(なかでも人的資源)を活用すること、2) 参加協働型の作品でアーティストが住民の自発性にコミットするなど地域コミュニティの主体性を重視すること、3) 地域活動との結びつきを企図したり、新たな拠点を整備したり、持続可能な戦略を持つこと、である。

1)と2)は、あいちトリエンナーレや大地の芸術祭で見た芸術祭による地域コミュニティの活性化の具体的プロセスに対応している。作品の性格やアーティストの視点である。それに対して、3)は、地域の取り組みの側からの視点で見ており、いちほらアート×ミックスの事例で明らかにした地域コミュニティ形成に影響を与えた3パターンにほぼ対応している。

芸術祭が地域づくりにつながらない要因等を検討したものの、その要因等は、芸術祭や地域の事情に応じて個別化・具体化していく必要がある。そこで、「リボンアート・フェスティバル はまさいさい・石巻のキワマリ荘」の事例研究では、要因等を掘り下げた場づくりの取り組みを紹介した。また、「札幌国際芸術祭 札幌資料館」の事例研究では、札幌資料館の展開について「市民の主体性向上」「新産業の創出」という2つの評価軸で定性的分析を行った。

以上から、これまでの7つの芸術祭の現地調査、分析を総括し、芸術祭が地域づくりにつなげる主な3条件が、1) 地域資源の活用、2) 地域コミュニティの主体性、3) 持続可能な戦略を持つことである、との仮説をたてた。仮説の検証が今後の課題である。

最後に、これまでの研究成果を時系列で整理しておくとして、平成29年度(2017年度)に、「あいちトリエンナーレ 長者町会場」、「札幌国際芸術祭 札幌資料館」、それぞれ雑誌論文に研究成果をまとめた。平成30年度(2018年度)には、「いちほらアート×ミックス 内田・月崎・養老溪谷」について、それぞれ雑誌論文に研究成果をまとめた。「リボンアート・フェスティバル はまさいさい・石巻のキワマリ荘」について、学会発表を行った。最終年度の令和元年度(2019年度)には、前年度に理論的分析を課題とした 奥能登国際芸術祭を、内発的発展論により、地域づくりにつながらない要因を多角的に考察した。大地の芸術祭についても、これまでの調査・分析結果をまとめ、ソーシャルキャピタル形成に寄与することを明らかにし、それぞれ雑誌論文に研究成果をまとめた。そのうえで、～ の事例研究の成果をまとめ、単著として刊行した。詳細は、5. 主な発表論文等 [雑誌論文] [図書] を参照されたい。

【参考文献】

1. 鷲見英司「大地の芸術祭とソーシャルキャピタル」『アートは地域を変えたか』2014.
2. 松本文子ほか「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通じたソーシャルキャピタルの形成」, 環境情報科学論文集, 第19号, 2005.
3. 寺尾仁「大地の芸術祭と人々」『アートは地域を変えたか』2014.
4. 吉田隆之『トリエンナーレはなにをめざすのか』2015.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉田隆之	4. 巻 19
2. 論文標題 芸術祭の地域コミュニティ形成への影響 いちはらアート×ミックスを事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アートマネジメント研究	6. 最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田隆之	4. 巻 17-18
2. 論文標題 札幌国際芸術祭のアウトプット評価—定性的分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アートマネジメント研究	6. 最初と最後の頁 104-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田隆之	4. 巻 15
2. 論文標題 芸術祭によるソーシャルキャピタルのプロアクティブ化 あいちトリエンナーレ2010・2013と2016の比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化経済学	6. 最初と最後の頁 102-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田隆之	4. 巻 11
2. 論文標題 過疎地型芸術祭が地域づくりにつながらない要因の多角的考察 奥能登国際芸術祭を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域活性研究	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田隆之	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 芸術祭とソーシャルキャピタル - 「大地の芸術祭 訪平集落」を事例に-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文理シナジー	6. 最初と最後の頁 215-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 吉田隆之
2. 発表標題 過疎地型芸術祭と持続可能な地域づくり - 奥能登国際芸術祭を事例に -
3. 学会等名 地域活性学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田隆之
2. 発表標題 芸術祭の地域づくりへの影響 リポーンアート・フェスティバルを事例に
3. 学会等名 文理シナジー学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田隆之
2. 発表標題 過疎地型芸術祭と地域づくり 奥能登国際芸術祭を事例に
3. 学会等名 日本文化政策学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田隆之
2. 発表標題 国際展がソーシャルキャピタル形成に寄与するのかーあいちトリエンナーレを事例に
3. 学会等名 文化経済学会 < 日本 > 2017年度大分大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉田隆之
2. 発表標題 芸術祭は地域コミュニティ形成に寄与するのか いちはらアート×ミックスを事例に
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会第19回全国大会 < 奈良 >
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉田隆之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 312
3. 書名 芸術祭と地域づくり “ 祭り ” の受容から自発・協働による固有資源化へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----